

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI

072

20.MAY
2003

特集 都市の文化再生産力／盛岡

発行者：都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集：都市の文化再生産力／盛岡

1. 都市文化の地層を掘り起こす…………… 1
 2. 「盛岡らしさ」へのこだわり…………… 4
 3. 歴史的環境の生と死…………… 6
 4. 都心居住と商店街の再生…………… 8
 5. 都市観光の水先案内人…………… 9
 6. エンバサダーデザインが街の風景を変える……………10
 7. 夜遊びは街のエネルギー……………11
 8. 昭和のまちづくりは映画館通りから始まった……………12
 9. 僕らがゴミを拾ったらかっこよくない？13
 10. 旧町名には物語が積み重なっている……………14
 11. 街はいたるところ僕らの舞台……………16
- 代表幹事会報告……………17
●おしらせ……………18
●事務局より……………18

特集・都市の文化再生産力／盛岡

地域を取り上げるシリーズ、今回は景観や都市デザインの分野で東北の雄たる盛岡の登場です。とりまとめは、盛岡を拠点に都市計画・デザインから近年は文化や地場産業まで活動領域を広げている久木田さんにお願ひしました。（編集委員 伊藤光造、石崎均）

特集

1

都市文化の地層を 掘り起こす

久木田 禎一

TEIICHI KUKITA
都市プランナー

飛行機の影と雲の影
山すそかけおりる
着陸ま近のイヤホン
お天気知らせるささやき
MORIOKAというその響きが
ロシア語みたい
……………
……………

銀河の童話を読みかけて
まどろみ 心ははばたく
あてもなく歩くこの町も
去る日は涙がでるわ

「緑の町に舞い降りて」から。
作詞：松任谷由美

●「文化力」が都市の盛衰を左右する。

グロス・ナショナル・クールが俄かに脚光を浴びるようになってきている。略してGNC。一国の「文化力」を指している言葉で、アメリカの学者が言い出した。日本発のアニメ、まんが、音楽、デザイン、ファッション、はては料理などが、世界の各地で受け入れられ、もてはやされていることに着目し、日本は「ものづくり大国」から「文化大国」への道を歩み始めたのではないか、あるいは、歩むべきではないか、というような論調である。ここで言う文化は、芸術などの狭い意味での文化ではなく、むしろサブカルチャーや大衆文化、生活文化に近いニュアンスで語られている。日本における携帯電話の使われ方、それを支えるハードなども若者文化の反映とも言えるわけで、これもまた、日本発の「文化力」の一端なのかも知れない。

さて、こうした国の「文化力」が、今後のメガ・コンペティションでの盛衰を決する大きな源泉になるであろうことは、なんとなく納得できるような気がするが、実は、これは国内での地域間競争や都市間競争にも、そのまま当てはまるのではないだろうか。

かつて都市の盛衰を決するのは、商業力や工業力であったり、交通力であったりしたわけであるが、これからの都市や地域の浮き沈みは、情報発信力を含めた「文化力」に左右されるのではないか、というのが盛岡特集を組むに当たっての仮説である。

きわめて卑近な例で話を進めてみよう。

盛岡冷麺は、今や盛岡を代表する産物の一つとなったが、盛岡冷麺を現在の地位に押し上げたのは、冷麺という「もの」の力そのものではない。冷麺を日常の食生活に取り込んだ市民の生活文化を背景に、巧みに全国展開を企図した戦略の勝利である。つまり盛岡冷麺を全国区商品に押し上げたのは、冷麺を日常的に食する市民の食文化を含む盛岡の「文化力」であると言える。

●画一が都市の文化再生産力を駆逐した

かつて、少なくとも戦前までは、ある程度の規模の都市（とくに城下町）は、その都市固有の伝統を土壌とする文化再生産力を有していた。また文化再生産力と結びついた地域産業創出力を備えていたように見える。ところが高度経済成長が始まる1960年あたりを境に、地方都市のそうした「力」は衰退の一途を辿り、文化再生産力や産業創出力は大都市に集中し、地方都市は大都市のおこぼれを頂戴する地位に甘んぜざるをえないところに追いやられてしまった。

地域固有の伝統や文化を再評価し、それらをまちづくりの推進力にしようとする動きは断片的にはみられたが、大きなうねりになるまでには至らなかった。

かくして全国どこでも同じような都市風景が現出し、そこで消費される文化もまた全国一律となってしまった。画一が差異を塗り潰し地方都市の文化再生産力を駆逐した半世紀と総括してもいい。

例外は沖縄かもしれない。もともと本土とはかなり異質の風土・文化を有していたということもあるが、それ以上に戦後、長くアメリカの占領下にあったが故に、地域アイデンティティを求める意識が日本の他の地域に比べ強烈だったということと関係しているのかもしれない。そのことがこのところ顕著にみられる三線などの沖縄発の音楽やゴーヤ・チャンプルなどに代表される沖縄料理の全国展開と関係しているともいえる。

●「文化力」を蓄えるための見取り図

さて、それでは、こうした流れの中で、地方都市を固有の価値を備えた「文化体」として再生させる方途はあるのか、あるとしてそれはどのような道筋で実現できるのか、勝算はあるのか——などを探っていかなければならない。

「文化力」を蓄え高めるための見取り図は次のとおりである。

1. 都市文化の地層を掘り起こす多様な市民運動を展開する。
2. 掘り起こした都市文化の地層を未来に続く時間軸の中で市民の共有財産とする仕組みを構築する。
3. 都市空間を市民による多様な文化活動が演じられる舞台(ステージ)として捉える。

●都市文化の地層を掘り起こす多様な市民運動を展開する

文化の地層という表現は、後で紹介する「文化地層研究会」に由来する。現在私たちが体験する都市の表層は、当然ながら連綿として続く長い歴史の積み重ねの結果である。目に見える形で今も残る古い建物や遺構は埋もれることをかろうじて免れた古い地層の断片とも言える。そうした古い地層の断片を手がかりに都市の表層を丁寧にくると思いがけず埋もれた地層がごそつと出てくるから面白い。古い地名や伝承もまた古い地層を探る手がかりとなる。長い歴史を有する都市は、幾重にも重なる豊かな文化の地層を有している。つまり私たちが暮らしている街の足下には固有の都市文化を再生産するための素材(ソフトを含めて)がごっそり埋もれているのである。しかし、それは掘り起こすことがなければ、埋もれたままで開示されることはない。

盛岡では、文化の地層を掘り起こす市民運動が多様な形で展開されている。旧町名保存運動、盛岡ことばを伝承する市民の会、

市内に流れる川の植生を元に戻す運動などである。

変わったところでは、ゆべし学会というものもある。「ゆべし」は、黒蜜の入った餅で盛岡の名物の一つである。市内のあちこちの店で売っているが、店でつくって売るのが一般的で、そのため各店各様の「ゆべし」がある。昔からあるものなので、老舗とか元祖とか名乗る店もない。これが定番と決めつけることもできない。ここに、「ゆべし」についての蘊蓄を傾ける人士が輩出する土壌がある。喧喧諤諤、蘊蓄を傾ける人が大勢いるので、「学会」が成立するということになる。

●掘り起こした都市文化の地層を未来に続く時間軸の中で市民の共有財産とする仕組みを構築する。

さて、次の課題は、こうして明らかになった古い文化の地層を現代、そして未来にどう繋げていくかである。これまでの成果をいくつか紹介してみたい。

①歴史的建造物保存条例

盛岡では1977年に歴史的建造物保存条例を定め、市内に残る由緒ある建造物の保存に努めている。この条例の特徴は、主に都市景観の観点から対象となる建造物を指定している点である。このため文化財の指定とは違って、内部の改変は許容する内容となっている。この条例は、歴史的な建造物は例え個人の所有であっても、通りから見える部分(外観)は市民共有の財産である、という思想を土台にしている。この思想が幅広い市民層に受け入れられていることを示す「事件」が起きた。指定を受けた保存庭園及び建物がマンション業者の手に渡り解体される危機に見舞われた。マンション業者の手に渡る寸前、市民生協(その後、市民生協は合併して県民生協となった)がこれを買収することになり存続が決まった。今ではきちんと修復され、一般に公開され、多くの市民、観光客が訪れる名所に生まれ変わった。

②保存樹木の指定とまちの木・通りの木

大きな樹木や姿形の良い独立樹、由緒ある古木などを対象に条例により保存に努めているが、これと連動するかたちで、「まちの木・通りの木」運動が展開されている。これは保存樹木を手がかりに点から線への展開をねらったものである。

下の写真は、盛岡の都市景観を語るとき欠かすことのできないイチョウの大木。市道の拡幅にともない切り倒すことが決まっていた。この木のすぐ傍にあった県立病院の入院患者が市に存続を強く要望。市長の判断で存続が決まり、道路は木を挟んで左右に振り分けられた。もう30年前の出来事である。



道路の真中に残ったイチョウの大木

③市内からの岩手山の眺望確保

盛岡の住人にとって岩手山は特別な存在である。そのことは市内の小中学校のほとんどの校歌に岩手山が歌いこまれていることでもよくわかる。これは、かつては市内のいたるところから岩手山が眺望できたことの証左でもある。しかし新幹線が開通した80年代以降、マンションなどの高層の建物によって、市内からの岩手山の眺望は著しく阻害されるようになっていった。こうした状況に危機感を持った市民から岩手山の眺望確保を要望する声が高まり、これに呼応するかたちで市は、城址や橋など市内の主要な地点からの岩手山の眺望を確保することを目的としたガイドラインを定めた。都市の中心部での建物の高さ制限は、景観価値と経済価値が鋭く対立するだけに、多くの市民の後押しなしには実現できないが、市民は経済価値ではなく景観価値を選択したと言える。

●都市空間を多様な市民活動が演じられる舞台（ステージ）として捉える。

埋もれた文化の地層を掘り起こし現在の都市の表層に浮かびあがらせることで、都市は独自の表情を取り戻すことが可能とな

る。比喩的に言えば、国が定めたマニュアルに沿って標準語だけで綴られてきたこれまでの都市デザインに「方言」を持ち込むこと。さらに都市が時間の堆積を経て今日があるということを目に見えるかたちで示すことで、都市は厚みのある陰影に富んだ空間を獲得することができるのではないか。めざすのは含蓄に富んだ都市表情とメリハリの利いた彫りの深い都市空間。

郊外のニュータウンや区画整理によってできた街が薄っぺらな印象を与えるのは、新しいからだけではない。現在という一つの時代の価値（という単純なモノサシ）だけでつくられているからに他ならない。

さて、都市空間はさまざまな都市活動の舞台とも言えるが、都市の中に設えられた大小さまざまな舞台を使って何を演じるかが次の課題である。

この特集では、都市空間を舞台に見立ての活動の一端も紹介してみたい。

14の映画館が集積する映画館通りを活用して映画好きの市民が結集して立ち上げた「みちのく国際ミステリー映画祭」、盛岡一番の繁華街である大通りを舞台にさまざまなパフォーマンスを繰り広げる若者たちのグループ、江戸時代からの古い町並みを観光客に案内する観光ボランティアなど。

この特集を引き受け、多くの市民グループと接触し話を聞きながら、「街はいたるところ僕らの舞台^{ステージ}」と言える市民が確実に育ちつつあると実感できた。

多くの市民が、都市空間という舞台^{ステージ}を自在に使いこなしながら自己を主張する。都市空間を自分たちの生活を彩り豊かなものにするためのツールとして使いこなす。そうした活動を繰り返すことによって、都市空間は市民の共有財産という意識が育っていくのではないかと思う。

＊

地方都市における文化再生産力を高めるための方途は多様であっていいと思う。というより多様であるべきだと思う。文化の地層を掘り起こす営為の中から文化再生産力を高めようという盛岡での試みは、迂遠な道に見えるかもしれないが、その土地とその土地が生み出してきた文化に深くこだわる人がいて、かつそれを支える人の輪があって、はじめて確かで持続する力になるのではと思う。

「盛岡らしさ」への こだわり。

脇田 健一

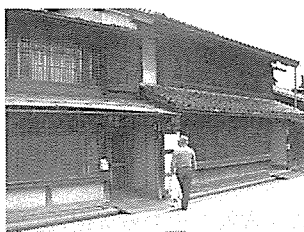
KENICHI WAKITA

岩手県立大学

総合政策学部助教授



八幡町の番屋（火の見櫓）



鉾屋町の町屋



市内からの岩手山

「杜と水の都」・「みちのくの小京都」

北上盆地の最北端に位置する盛岡。この街を訪れる人々の多くが、「盛岡は美しい街だ」という。多くの市民も、自分たちの住むこの街を「潤いがある」と評価する。

盛岡の北西には雄大な岩手山がそびえ、北東には美しいラインをみせる姫神山が位置する。遥か西方には奥羽山脈を望み、東部は北上高地に面している。南を除いた街の三方を、豊かな山々が優しく包み込んでいる。街のなかには、北上川が南にむかって流れ、この北上川には、奥羽山脈からは雫石川が、北上高地からは中津川が合流する。これらの川のうち、特に中津川には、秋には鮭が遡上し、夏には子ども達が水遊びを楽しむ。

人口約28万人の都市で、このような光景がごく普通に見られることに、多くの観光客が驚く。盛岡が「杜と水の都」と謳われるのは、豊かな自然と人々の日常の暮らしが隣り合わせに存在しているからなのである。

このような自然条件が生み出す魅力に、盛岡の歴史性がさらに深みを与える。盛岡は、南部藩20万石の城下として約400年の歴史をもつ。現在でも市内の各地に、昔の商家のたたずまいを残す町並みや、明治以降の時代の面影を残す近代建築をみることができる。また、城下町建設のさいに生み出され、屈曲とT字路、そこに斜めに交差する街路から構成される、漢字の「五の字」状の街路構成を、現在においても市内の各所に見出すことができる。戦災にほとんどあわなかった盛岡は、いまでも城下町時代の骨格を、その根底において保持しているといつてよい。

盛岡は「みちのくの小京都」とも呼ばれるが、それは、いままできたような自然条件と歴史性とは縦糸と横糸になり、独特の都市景観を織物のように編みあげてきたからにほかならない。

「盛岡らしさ」の喪失とこだわり

このような特異な都市景観をハードとして捉えるならば、それを編みあげてきたソフトとは、長い歴史のなかで繰り返されてきた人々のライフスタイルや地域文化ということになるだろう。もちろん、盛岡の都市景観も少しずつ変化はしてきた。しかし変化はしながらも、そこに住む市民からすれば、この街の都市景観のもつ特質を「盛岡らしさ」として感じ取ることができた。

それは、都市景観のシークエンスを、ライフスタイルや地域文化といったソフトが可能にしていたからだ。

ところが、そのような「盛岡らしさ」が衰退する時代がやってくる。1970年の岩手国体以降に進んだ都市化、そして1982年の東北新幹線開業に伴う首都経済圏・文化圏からの強い影響は、確実にソフトとしてのライフスタイルや地域文化を変化させた。結果として、ハードとしての都市景観も変化していくことになった。そのような変化を、多くの市民は「盛岡らしさ」がなくなると嘆く。しかし、そのような嘆きは、逆にいえば、変化のなかにあっても「盛岡らしさ」にこだわり、「盛岡らしさ」を強く意識しているからにほかならない。そこから、あらたなソフトの取り組みが生れてくることにもなった。

1984年、全国に先駆けて盛岡市によって策定された「都市景観形成ガイドライン」は、行政と市民、そして地元の建築士会が協働しながら研究を進め、その結果として生み出されたものである。ガイドラインでは、市街地の中心にある岩手公園から、市民にとって盛岡市の都市景観の基軸ともいえる岩手山の眺望を確保するための基準がもうけられた。このガイドラインに代表される盛岡の景観行政は、「盛岡方式」と呼ばれている。法的強制力はなく、あくまで市民の理解と協力を必要とすることが特徴だ。このような動きは、ハードとしての都市景観の変化を食い止め、「盛岡らしさ」を維持するためのソフトの新たな構築として捉えることができる。

しかし、このような「盛岡方式」も万能薬ではない。岩手公園からの岩手山の眺望を確保できたとしても、その後、市内のいたるところにマンションや高層ビルが林立することになった。普段、盛岡の街を歩いていて、周囲の山並みの眺望を楽しむことはもはやできない。また、歴史性を感じる建築物や町並みについては、いわゆる文化財保護行政によって、価値のある「文化財」として保護されるものは残るにしても、多くの市民が「盛岡らしさ」を感じるごく普通の民家や町並みは確実に減少している。

すなわち、「線」としての眺望や、「点」としての文化財は保全されても、多くの市民が「盛岡らしさ」を感じる「面」として広がる眺望や町並み等は、保全されていないのである。「盛岡方式」という、いわば行政主導市民参加型のまちづくりの手法、そし

てガイドラインや要綱といった規制による手法が現在においてはもはや限界を示している。新たなソフトの構築が求められているのである。

「盛岡らしさ」を支える新しいソフト

そのような盛岡の現状のなかで、近年、興味深い市民活動が生れてきている。ひとつは、「文化地層研究会」(1)である。この研究会は、2000年、盛岡の街をテーマとするインターネットの掲示板で知り合った市民によって結成された。「文化は地層のように積み重なっている」との考え方をベースに、地域に埋もれた「歴史」や「文化」を深く掘り起こし、広く市民の間で共有していくことを研究会の目的としている。

結成後、この団体は様々な活動を実に精力的に展開してきた。そのなかでも特筆すべきことは、「城下盛岡旧町名・べんじえもの探求地図」や「城下盛岡旧町名探求地図」の制作であろう。旧町名が書かれた地図を片手に市民が街を歩くことによって、「いつも何気なく目にする街や道には」、「歴史や文化に彩られた実にたくさんの物語が、地層のように積み重なっている」ことに気づいてもらい、そのことによって「街のアイデンティティ（個性、独自性）を取り戻していくことを目指しているのである。もちろん地図の制作だけではない。旧町名に関するシンポジウム、盛岡の歴史や文化に関する研究会なども頻繁に開催している。

このような文化的な活動以外に、望楼（火の見櫓）付き木造2階建ての「八幡町番屋」（明治期に建設された消防施設）の保存運動をたちあげ、番屋の復元改修による保存の要望のための署名活動等をおこなった（この保存運動は、別の市民団体「歴史を活かした街づくり実践隊」と連帯するなかで展開された）。当初、盛岡市は番屋を解体し新しい施設を建設すると決定していたが、運動からのアピールや世論の高まりもあり、八幡町番屋を使用する消防団（第4分団）や地元の後援会と市が話し合い、番屋の望楼部分を修復し、新設するコミュニティ消防センターの建物の上に設置することでこの問題は決着することになった。

この「文化地層研究会」以外に、盛岡では魅力的な活動が若い世代からも生れつつある。たとえば、地元の岩手県立大学の学生らによって企画されている、芸術祭「ArtなMOIRIOKAめぐり」もその一例だ。

この原稿の執筆時には、まだ準備を進めている段階だが、この芸術祭では、市内の主要商店街6ヶ所を拠点に、それぞれに「音」・「芸」・「装」・「踊」・「造」・「奏」のジャンルを割り当て、市街地を会場に、岩手県を中心に活動しているミュージシャン、ダンサー、アーティスト、サークル団体、各種学校の学生等によって発表が行われる。

企画のねらいは、各地域に特色を持たせ、多くの市民に、街を巡り歩きながら個々の発表を楽しんでもらうと同時に、「盛岡の街の良さ・個性を感じて」もらうことにある。6万人の動員を目指している。本号でも紹介されている地域通貨を使った「シネマ・ストリート・プロジェクト」などもそうだが、このような若い世代が、「盛岡らしさ」を自分たちなりに捉え直し、その価値を多くの市民と共有しながら、将来にむかって継承させていこうとする活動は、今後さらに注目されてよいと思う。

「価値」と「負担」の共有

ごく一部ではあるが、「盛岡らしさ」にこだわる市民主体の活動を簡単に紹介してきた。これらの活動に共通するのは、手法は異なるが、盛岡という街のもつ「価値」を多くの市民と共有しようという姿勢である。おそらく、次のステップにおいては、これらの各種団体が横に広く連携し、「盛岡らしさ」を社会的に担保するネットワークを拡大していくことが課題となるだろう。それは、このようなネットワークの存在が、「価値」の共有とともに「盛岡らしさ」を継承するために必要な社会的・経済的な「負担」の共有をも可能にし、従来の「盛岡方式」のまちづくりを超えて、新しいまちづくりのソフトの構築を可能にするからである。今後の、「盛岡らしさ」にこだわった市民活動の展開に注目していきたい。

(1)<http://bunkachiso.hp.infoseek.co.jp/>

(2)<http://www-circle.iwate-pu.ac.jp/c-festa/art/>

歴史的環境の 生と死

渡辺 敏男

TOSHIO WATANABE

岩手県公会堂県民フォーラム
副代表

ぶらり盛岡研究会副代表

平成6年、非常勤講師として通う岩手大学の施設課から農学部旧盛岡高等農林学校本館の調査、改修設計の依頼がきた。聞けば、登録設計事務所のすべてに断われ、困っているとのことで、引き受けることにした。大正元年に竣工し、10年前に卒業生を中心におこった保存運動によって残っていた。これは改修の年に、国の重文に指定された。

ところが同じ頃、大正2年の城南小学校の解体が決まり、私の研究室（福井正明環境デザイン研究室）では全員で記録保存のために調査に取り組んだ。竣工が1年違いの建造物で、根本的な傷みもなく、地元にとっては土産土法といえる最後の木造校舎である。片や国重文、片や解体、この運命の違いはどこから生まれたのだろう。

盛岡市は40年代の開発の時代に危機感を抱き、昭和51年に自然環境保全条例に歴史的環境、建造物等の保全を加えた。50件近いリストから同意が得られた18件をまず指定した。当時、全国的に見て画期的なことであった。この背景には、多くの人々の活動、運動があった。しかし、その後、高齢化等、徐々に運動は下火になり、平成4年に4件が追加されたに過ぎなく、行政も財政を理由に動きが鈍くなった。

この間、この制度は確かに一定の役割を果たし、重要な建物は残った。しかしその後の20数年の間に解体された建造物のことを考えると、釈然としない。現在、各地で始まった個性、特徴、生活文化財を活かしたまちづくり、都市景観の再生という時代から見ると、なおさらである。

私が盛岡に住み始めたのが昭和55年で、ちょっと前までは、個性豊かな町並み

がまとまって旧市街地に残っていた。このことが、東京から私を引き寄せた。

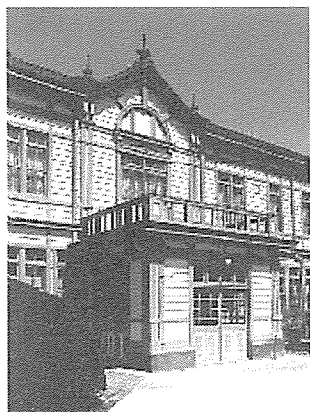
例えば、行政の中心、内丸には、大正期のモルタル建築の裁判所、昭和40年頃では小さな物見塔を乗せた県立図書館、工業試験場、それより前ならゴシックの洋風木造の県庁、隣には中央にひととき高い塔を持つ昭和の時代の政治、文化の殿堂岩手県公会堂（県会議事堂、戦前の公会堂多賀）、正面市役所から中の橋にかけて、羽目板貼の洋風木造2階建ての分庁舎、隣は緑の庭園をもつ料亭・秀清閣多賀（元明治時代の県令の私邸）、大正期のモルタル建築の市少年センター（旧商工クラブ）。

橋を渡って赤れんがの旧盛岡銀行本店（国重文、葛西萬司）、斜向いに蛇腹扉のエレベーターの松屋デパート（葛西萬司）、右に折れて、左に大正期の御影石貼りの旧安田銀行、向いにもう少し前ならハーフテンバーの郵便局、町家を挟んで旧第九十銀行本店（現啄木・賢治青春館、横濱勉、市文化財）、斜向いに葛西萬司の旧岩手銀行本店、隣に豪商小野組の系統の本店だった酒類卸商業協同組合、和風の照又旅館、向いにテラゾーと白タイル貼の文明堂書店、3階の和洋折衷の高与旅館と明治から昭和初期の町家を中心にしながら近代化時代の建造物が挿入され、各時代の建造物が折り合いをつけながら町並みを形成していた。

また、木造の大型の学校も市街地の中心部に、城南小（若園町）、大慈寺小（大慈寺町）、仙北小（仙北町）、杜陵小（肴町）、桜城小（大通）、下小路中（愛宕町）、盛岡一校上田校舎（上田、横濱勉）、岩手高校（長田町）、岩手女子高校（大沢川原）、盛岡白百合学園（中央通）等重要な都市景観を担っていた。

また、辰野時代の葛西萬司の旧盛岡劇場は木造の劇場、葛西が円熟期を迎えた時期の作品である旧岩手農工銀行は、全国区の価値ある建物だったと思う。

これらが解体された背景には、保存条例が歴史的景観を目的にしながら、従来の文化財的価値の建物にこだわったこと。安易



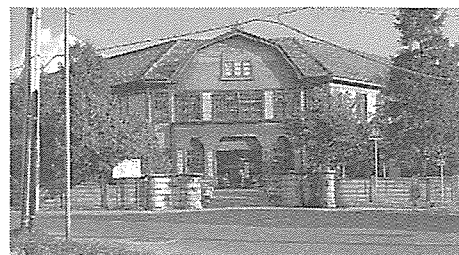
旧盛岡高等農林学校本館
現岩手大学農学部
付属農業資料館 国重文



旧城南小学校



旧中の橋界隈の街並み



旧仙北中学校

な老朽化問題に納得してしまったこと。さらに盛岡の場合、今や全国的にみても笑われてしまう「面影保存」が学校建築を中心とした公共的な建物に採用されたこと。この安易な方法は新しい建物自体をつまらないものにしてしまった。鉄筋コンクリートの表面に木造の柱、梁を模した凸部をつけ、色分けした奇怪な建造物が盛岡版「面影保存」である。もちろん、老朽化が進んでいた建物もあったかも知れないが、歴史的景観、建造物の価値は解体されてしまうと二度と手にはいらないことに気付くべきであった。当時すでに重要文化財の修理を中心に修理技術がある程度確立されていた。ましてや盛岡の場合、工事に直接関わる熟練の職人が多くいた時代である。逆に言うと、だから彼等の衰退を早めてしまったと言っても良いだろう。

そのなかで、近年、市により買い取られた明治の役宅一ノ倉邸の民間有志による活用、明治の邸宅の南品荘の民間団体による公開と活用、料亭・大清水多賀の一部は失ったが営業継続、一度は全解体だった明治の八幡町番屋の市による望楼の保存、旧第九十銀行本店の啄木・賢治青春館への復元しての活用、岩手県公会堂の保存決定、戦後直後の民芸の盛久旅館の保存、明治のお雇い時代の洋館・旧石井県令私邸の再活用と、新しい動きとして一定の成果が生まれている。

町屋はというと、旧市街地で最も多く、この町の景観を決定付けている町家は、移築保存された国重文1件、県の重文1件、保存条例が3件の指定と、その数の割に少ない。町家は歴史的には京町家に代表されるが、各地方に各地なりの特徴をもつ町家

がある。ここ盛岡も明治に入ると贅を尽くしたものもあらわれ、全体的に充実した町家形式が確立される。昭和戦前まで建設され、表の顔が洋風化されても内部は町屋形式で残った。南、東側に通り庭（ロージ）を持ち、間口3間ぐらいたと店、続いて神棚、吹き抜けを持つ常居、仏間を持つ場合が多い座敷、縁側、通り庭に勝手・水まわり、坪庭、奥に土蔵か物置があり、6、7間以上となると、2列3間取りとなる。100年を超えるものもざらで、文化財級も多い。

しかしこの間急速に失われ、いまや油町横丁界限、葺手町、紺屋町の中津川側、惣門界限の馬町、河原町、鉦屋町にまともに残っている程度である。他に比べてまともだった仙北町は近年都市計画の道路拡幅によって一変してしまい、拡幅が残る明治橋周辺の保存指定2件も有り様を変えようとしている。さらに、前記の馬町、鉦屋町は新たな都市計画道路によって、消滅の危機にある。

大正から昭和前期に開発された旧八幡、志家、加賀野、長田、菜園地区には和風民家が残っていた。現在もまばらにはなったが、往時の雰囲気は維持している。

民家の維持、保存対策は難しい。そこには、地方特有の跡継ぎの都会流出と高齢化、相続の問題、古さに対する劣等意識、技術的には解決できる寒さ等の生活環境の改善に対する諦め等がある。しかし近年、町家、和風民家に住みたいという需要も旺盛であるが、出合いのミスマッチは続いている。

この町をこれからどうするのか。第3次産業が80%を超え、文字どおりの流通商業都市盛岡。財政危機、人口も増えず、少子化、高齢化時代は交流人口を増やすことが重要になる。そのためには、歴史的資源を活用して、魅力あるまちに再生し、知的観光、心地よい生活環境滞在型観光を目指すべきであろう。時間空間を大切に、生活するのにうらやましい都市づくりを考えたい。



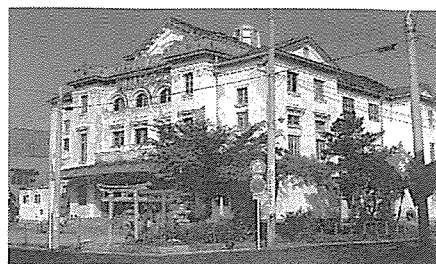
旧八幡番屋
望楼は保存された



旧第九十銀行本店
現啄木・賢治青春館
市文化財



旧岩手農工銀行



旧盛岡劇場



鉦屋町の町並み

都心居住と 商店街の再生

浅井 敏博

TOSHIHIRO ASAI

不動産カウンセラー

再開発コーディネーター

全国的に地方再生が叫ばれている。そのほとんどが中心市街地に存在する古くからの商店街だ。かつての一番商店街もシャッターロードとなり活力が失われている。その原因を探て見ると

- ①事業承継者がいなく商店街に青年部の組織活動が活発でない
- ②業種転換、業態転換をする経営者が少なく魅力ある商品がない
- ③アーケードや路面の改修が行われていない
- ④イベントが少なくポイントカードなどのサービスがない
- ⑤空き店舗対策が行われていない
このほか外部要因として
- ⑥県庁、市役所、図書館などの行政施設が郊外に移転した
- ⑦大型の病院、大学などの集客施設が移転した
- ⑧郊外に大型SC（ショッピングセンター）が開設された

このような要因がいくつか重なり、ほとんどの地方都市が衰退し地方再生が国の重要な課題となっている。

さらに一般的な要因として少子高齢化の問題がある。高学歴化が進み大学を卒業した子ども達が郷里に就職できず、親の扶養や介護のあり方が新たな問題として注目されている。

問題解決のキーワード

「高齢者の都心居住」

このキーワードをもとに「盛岡のまちづくり手法」のポイントを考えて見る。

①時間軸

現在のまちは、長年にわたり多くの人々が、そのまち固有の伝統や産業にかかわりながら「生きてきた歴史」であるとともに、将来の子ども達に残すべき「財産」であるという考え方が必要だ。特に岩手県の県都である盛岡市は、開町400年の歴史を持った城下町であり、伝統的な祭りや行事がたくさんある。来訪する人々が、このまちをすばらしいと感じるのは、自然環境や街並みだけではなく、生活空間に伝統的な仕事やまつり、芸能などのまちの個性を醸し出す人々がたくさん住み続けているからなのだと思う。つまり、昔からずっとそこに住んできた人々が、いつまでも快適に住みつづけることができるまちが望まれている。

②将来推計人口

少子高齢化の社会の進行がわれわれの住

む社会にどのような影響を与えるのかを考えておく必要がある。2030年における岩手県の年少人口割合は11.8%、生産年齢人口55.9%、老年人口32.3%である。全国的に同じような状況であるが3人に一人が老年である社会は、現在のように物販や飲食、アミューズメントなどが中心のまちより医療、介護、リハビリなどが充実した福祉型社会が求められる。戦後のベビーウーマーの成長に伴い郊外の住宅開発が都市のスプロール化を招き、高度成長の波にのったモータリゼーション社会が古き良き伝統やコミュニティが伝承されてきたまちの商店街を破壊していった。地方都市再生の視点は、今まで日本が進んできた逆の道に向け再検討する必要がある。団塊の世代がたどってきた道筋に、便利さを追い求めて捨ててきたもの、置き忘れてきたものなどがたくさんある。それらを活かしてまちなかに居住できるシステムを創り出さなければならぬ。

③安全、安心、快適

一般的に中心市街地の商店街は、郊外的大型SCの影響で客足が遠のいたと考えられている。だが、一概にそうといえるだろうか。自分のまちの足元を見てみよう。道路の縁石やブロックタイルがでこぼこで高齢者や障害を持った人、ベビーカーなどが安全に歩けるようになっているだろうか。商店街のアーケードの整備が中途半端でむしろ客が来られないようなバリアーが知らぬうちに張られているのではないだろうか。イギリスで始まったショップモビリティの運動は高齢者や体が不自由な人々が安全に移動できるように電動スクーターや車椅子を商店街に備え安心して快適にショッピングができるようにした。この運動の考え方を取り入れてまち全体に安全に移動できるようにバリアーを取り除き安心して快適に暮らせる生活空間をつくることをタウンモビリティという。さらに、高齢者や障害を持った人だけでなくすべての人々に対して生活のすべての分野で、安全で安心して快適に暮らせるようにすることをユニバーサルデザインといい、いままちづくりの重要な指針と考えられている。

④まちのマネジメント

過去のまちづくりに関する施策は、道路や河川などの基盤整備が中心で国の全国総合発展計画に合わせて、県、市町村の総合計画がつくられ国により策定されたモデル事業を導入し補助金頼りのまちづくりが多

都市観光の

水先案内人

盛岡ふるさとガイドの会

畑山 茂

SHIGERU HATAYAMA

財団法人盛岡観光コンベンション協会

かった。その結果、日本全国どこに行っても金太郎飴のような施設がつくられ、まち固有の歴史や個性が失われてきた。さらに、規制緩和やグローバル化に伴う企業の国際化の影響で郊外型の大規模SCが次々と進出し、代わりに多くの工場が撤退して行った。

一方、国は地方分権を推進し、地方は自立を求められるとともにまちづくりにおいても自己責任が要求される。

このような状況の中で、まちづくりを行政や議員だけに任せるのではなく、民間のNPOやまちづくりの集団が参画し始めている。自分たちの住みたいまちを官民協働でつくろうという気運が生まれようとしている。

「21世紀の観光は、単なる観光地の物見遊山に止まらず、多様化が進むとともに旅行者が日常生活の延長上で異日常生活、すなわちその地に暮らす人々の如く、地元の人々と触れ合いたい」という志向が高まっている。

都市には様々な人々が暮らして多彩な文化を育んで来たこともあり、多様な人間の欲求が満たせる場、異日常体験が出来る場、多種多様の情報を得る場等々の特性を持ち、それらが融合して都市観光の魅力となり、旅行者に対する訴求要因になっていると言えよう。

従って、都市における観光振興は狭い視野での観光に捕らわれることなく旅行者の多様なニーズに応えていくことが大変重要になってきている。

平たく言えば自然とマッチした都市景観、歴史的神社仏閣、美味美食等、いわゆる目に見える旅行素材に加え「また来てみたい、訪れて良かった、愉しかった」という「人の情けや癒し」を求めて旅する旅行者に、もてなしの心でお迎えし「また来訪したい」という気持ちを起こさせるホスピタリティマインドの具現者として、さらには地域評価を高めていく水先案内人としてガイドへの期待は大きい。

「盛岡ふるさとガイドの会」はこのようなニーズを基に、平成13年4月に発足。42歳から最高齢80歳までの合計32名で構成され、養成期間中には郷土史家や郷土食研究家、伝統工芸従事者、芸術・美術専門家、方言指導、旅行代理店経験者等による講習を重ねた後、盛岡観光コンベンション協会です一定受講日数を経た者にガイドの委嘱を

る。少子高齢化社会に代表される右肩下がり社会では、実体経済にあったスピーディーな判断と行動が要求される。そして、なによりも将来のまちの「あり方」を求めて「まちをマネジメントする」という気概が必要になる。

今後の進め方

賑わいのある商店街では、既に消費者、商業者という単純な構図では捉えていない。ともに生活者の観点から互いの生活を補完し協働するという関係を構築することで商店街が新しい生活空間になる。高齢者の都心居住を進めることによってまちに賑わいが出るシステムづくりを創って行きたいと考えている。

行っている。

盛岡ふるさとガイドがご案内するコースは、都心を流れる中津川を中心とした徒歩観光で、所用2時間半程度。修学旅行生にも人気がある。

石川啄木や宮澤賢治の青春時代を迎えるもの、郷土が輩出した原敬、米内光政や新渡戸稲造等の先人達を偲ぶもの、岩手の名のおこりを伝えるもの等、ローカル色に溢れた全5コースは、共通ガイド料3,000円税込みとなっている。

ボランティアガイドは、旅行者にその土地の良さ、素晴らしさを伝えるために自らがその地域の良さを知り、自信を持ってそのことを伝えることのできる「語り部」でなくてはならないと思うが、これらの活動を通じて郷土愛や郷土への誇りを持つことに繋がるとともに、活動が露出することによって市民の観光に対する関心の高まりや、後継者の育成、退職者や高齢者の生き甲斐づくり役にも貢献しており、高齢化が進行する現代にあって大きな期待が寄せられている。



盛岡ふるさとガイド

ユニバーサルデザイン が街の風景を変える

大信田 康統

YASUNORI OOSHIDA

もりおか障害者

自立支援プラザ所長

日本の身体障害者福祉法は、昭和25年(1950年)に施行され今年で53年になる。すなわち日本で福祉を語られ始めて、たかが半世紀である。

昭和17年(1942年)生まれの私は、日本の福祉の歴史と共に生きて来て思うことは、この20年で、日本の福祉制度や障害者の意識が大きく変わった。自ら食事もとれず、入浴や着替えも困難な重い障害を持った人でも一人での生活を選び、パソコンを使い自立した生活をしている人たちが増えてきた。

10年程前は、これほどの障害であれば当然のように療護施設に入ることを進められたであろうが、今は自己選択、自己責任のもと地域での生活を希望することが増えている。行政も支援策を講じ重い障害があっても地域生活が可能になりつつある。

岩手県の身体障害者数は、平成15年3月末で54,545人と前年の同時期に比べ874人も増加しており、毎年1,000人前後の増加傾向にある。また54,545人中、65歳以上が65.8%を占め高齢化が進んでいる。国民の平均寿命も世界一の長寿国であることを考え合わせると、街、公共交通機関などは、もっと使いやすく便利にする必要がある。モビリティタウン構想もその一環であろうが盛岡には、まだ具体的動きは見られない。

ここ数年、国、岩手県、盛岡市も高齢者や障害者にも移動し易く、使い心地のいい街づくりを進めているように思う。その推進力になっている一つの要因はハートビル法(平成6年)や交通バリアフリー法(平成12年)の施行であろう。岩手県においても、ひとにやさしい街づくり指針(平成12年)の整備や盛岡市のオムニバスタウン構想など、我々障害者の社会参加を支援する取り組みが幾つか進んでいるが具体的事例を挙げると、例えば、映画館、野球場、在来線の駅等の施設は利用できないのが当たり前で、利用するには、それなりの覚悟が必要な代表的施設であった。

しかし先日、岩手県営球場でプロ野球観戦を楽しんで来た車椅子の仲間に出会った。いろいろ聞いてみると、内野席に車椅子用席があるので、ここ2~3年欠かさず観戦に来ているのだと言う。随分変わったものだと感心した。映画館にもエレベーターやスロープ付いてたりして便利になったが、中には残念なところもある。

私が県民会館大ホールでの催しものを観に出かけたときのことである。係員から、

こちら「車椅子席になっております」と案内された席は、一階中央の最後列の席であった。

ここは車椅子5台ほど並んで観る席で、双眼鏡でもなければステージに立つ人の顔が見えないほどの所にある。いくら良い席を買っても、結局、この席に案内されるのかと思うと、やっぱり寂しい気がした。

平成25年頃には国民の4人に1人が65歳以上の高齢者が占めるようになる。車椅子利用者も増えるが「車椅子」だからと、本人の意思に関係なく、特定の席に押し込められるのはノーマルな社会ではないと思う。そこでユニバーサルデザイン思想が生かされてこそノーマライゼーションの地域づくりにつながるのである。

そもそもユニバーサルデザイン思想とは、故ロン・メイス氏(ノースカロライナ州立大学デザイン部・ユニバーサル・デザイン創設者)が、ある商品開発にあたって提唱したものであるが、私の記憶では、近視の人たちがシャワールームでシャンプーとリンスを簡単に使い分けることのできるよう容器の先端部分に凸の突起物をつけたところ、視覚障害者や子どもにも簡単に理解できるデザインとの評価を得て、その考え方が建築物まで及んだと記憶している。

その思想に7つの原則がある。(1)誰にでも公平に利用できること。(2)使う上で自由度が高いこと。(3)使い方が簡単ですぐ分かること。(4)必要な情報がすぐに理解できること。(5)うっかりミスや危険につながらないデザインであること。(6)無理な姿勢をとることなく、少ない力で楽に使用できること。(7)アクセスしやすいスペースと大きさを確保されることである。

このような考え方が、街づくりに生かされたら街中の風景が大きく変わるだろう。今まで体験したことない豊かな人間関係が創られる気がする。高齢者、重度の障害を持つ人も日本経済を支える一員として生き生き働く姿が映る。新しい日本を世界に紹介される日が必ずやって来る。その、かすかな動きを岩手盛岡から興したいものである。

一人の障害者として、こんなことを言える時代に生きていることが夢のようである。

夜遊びは 街のエネルギー

内澤 稲子

INEKO UCHIZAWA

岩手県公会堂県民フォーラム
副代表

仕事を終えた人たちが、まっすぐ家をめざすようでは、街の活気は生まれない。大人の寄り道は、街を元気にする大切な要素だ。寄り道の先は、もちろんお酒を飲むところ。加えておいしい料理や心地よい音楽があれば最高、と個人的に思っている。ここでは盛岡の夜遊びスポット3軒を紹介しよう。いずれも個性にあふれ、地元の人間が集う空間というだけでなく、外から人を引き込む魅力を備えた店だ。

●お天道さまからの恵み

江戸時代からの商人町・肴町のビルの地下に『BRUT』という店がある。オーナーの菊地俊弘さんは、この他にも市内に4店舗を構えていて、どの店でもこだわりのビールやワイン、厳選した食材による料理を提供してくれる。席についたら、まずギネスを1杯。料理はついお気に入りを選んでしまう。ちゃんと大豆の味がする自家製ざる豆腐、それから豚しゃぶ。盛岡近郊の契約農家から仕入れている豚肉は絶品だ。

「食べるというのは、お天道さまから恵みをいただくこと。料理にも酒にも、それが生まれた土地で脈々と受け継がれてきた歴史や精神があると思うんだよね。それを食堂として当たり前提供しているだけですよ」と菊地さん。お酒や食材に関する彼の深い哲学が、お店に反映されている。でも、決して難しい店ではない。わいわいと話をしながら飲めるから、グループで押しかけることもしばしばだ。

…あ、次はキルケニーいきます。



『BRUT』と同じビル1階のパブ形式の『立ち飲み処BRUT』

●セッションは深夜まで

お酒を片手に音楽を聴く。これが大人の楽しみというものだ。盛岡で一番の繁華街大通裏手にある『すぺいん倶楽部』は、ジャズに酔いながらお酒を傾けられる場所。月に数回はジャズミュージシャンのライブが行われる。マスターの西部邦彦さん自身がサックス奏者で、彼の人柄を慕って多くのミュージシャンが集まって来るのだ。ミュージシャン同士の口コミの影響か、最

近は西部さんと面識のないミュージシャンからも、『すぺいん』でライブをさせてほしいとCDが送られて来る。

「ライブはやっぱりいいしね。お客さんもミュージシャンも楽しんでくれば、それがうれしいから」と西部さん。そんなマスターの気持ちが伝わるのだろう。乗りに乗ったミュージシャンのセッションは、深夜に及ぶことも。『すぺいん』で演奏したい、『すぺいん』で聴きたい。その気持ちが、また同じ場所に足を運ばせる。

…次のライブ、予約ね。よろしく〜。



すぺいん倶楽部でのライブ風景。左奥がマスター。
photo by Mizuhiko Yoshida

●音を求めて盛岡ツアー

3軒目も音楽のある店。大通の『モンドリアン』は、マスターの三崎ともやすさんがギターを演奏し、歌うライブスポット。自らアレンジしたジャズ、カントリー、映画音楽、日本の曲とジャンルを超えたエンタテインメントを繰り広げている。もともと東京・恵比寿に店を構えていたが、5年前に盛岡に引っ越してきて開店した。

この店には地元の人間はもちろん、全国の三崎ファンが、彼の音楽を求めて足を運ぶ。恵比寿時代のお客さんが、出張や旅行などの機会をとらえて立ち寄るのだ。ときにはモンドリアン・ツアーというグループに出くわすこともある。

「盛岡に住まわせてもらって、ホントに盛岡がいいところだと思うから、少しでも多くの人に来てほしいんですよ。盛岡に行ってみたい、街でちょっと飲んでみたい。そう思わせる魅力づくりができたらいいなと思いますよ」という三崎さん自身が、今では盛岡の魅力のひとつになっている。

…あの曲、久しぶりに聴きたいなあ。

街の中にとどまりたいと思わせる何かに、今日も引っ掛かってしまったようだ。こうして夜が更けていく。

昭和のまちづくりは 映画館通りから 始まった

内澤 稲子

INEKO UCHIZAWA

岩手県公会堂県民フォーラム
副代表

盛岡の中心市街地の一角に「映画館通り」と呼ばれる長さ約400mの通りがある。地図には載っていない。しかし盛岡駅に降り立った人がタクシーの運転手に告げれば、間違いなく連れて行ってもらえる。道行く人に聞いても、ちゃんと道順を教えてもらえる。

その名の通り、映画館通りには市内すべての映画館14館が集中している。人口比では国内トップ級の数と思われる。映画館通りという名が自然発生的に生まれ、通称になっている場所は全国でも珍しい。

映画館通りの誕生は、昭和の初めにさかのぼる。地元の有力経済人が結集して新会社をつくり、映画館通りを含む地区の都市開発を行った。そのほぼ中心部に映画館ができた。この映画館は、1人1脚（それまでは長椅子が一般的だった）、ウェスタン再生機を備えた最新式の映画館で、東京以北では札幌の映画館と並んでもっとも近代的ともてはやされたという。

●盛岡の財産を生かしたイベント

当時の映画館は、今とは比べものにならないほどの集客力をもっていた。この映画館の立地が呼び水となって周囲に飲食店、商店、旅館などが建ち並び、さらに2館、3館目の映画館がつくられた。戦後、進駐軍が盛岡に駐屯した頃も、この通りには映画館が並んでおり、アメリカ兵たちに「シネマ・ストリート」と呼ばれ親しまれた。それが日本語に翻訳され、今も呼び継がれているのである。

その映画館通りに、映画ファンやまちづくりに関心の高い市民たちが目をつけた。「映画館通りは盛岡の財産。この財産を活かして何かできないか」。そうして生まれたのが「みちのく国際ミステリー映画祭」である。1997年にスタートし、今年10月で7回目を迎える。映画館通りを舞台とする継続的なイベントを開催したいという思いの結晶だ。

映画は人々に夢を与えるとともに、街に人を集める装置としての役割を担ってきた。映画館という小さな空間の中で、人々は異国の文化やファッションを知り、登場人物に自分の思いをだぶらせ、ときには泣き、感動を共有してきた。都市の中で光り輝いていた映画館を再評価し、もう一度、映画館通りを都心再構築のきっかけとしてとらえたい。映画祭の開催には、そんなもくろみもあった。

盛岡市では1999年度に商工会議所が中心となり「コンパクト・シティ」をキーワードとする中心市街地活性化基本構想を策定した。また観光においては「歩いて楽しめるまち」と銘打って、中心市街地の魅力的なスポットや散策コースをパンフレット等で紹介している。映画祭は都心における交流の機会を増やし、さまざまな活動を活性化させる空間づくりの実験でもあった。

●映画館通りは交流の舞台

映画祭の期間中、街は映画を観たい人、監督や俳優、ミステリー作家などのゲスト陣に一目会いたいというファンたちであふれかえる。ゲストたちも時間が空くと、マップを片手にふらりと通りを歩いていたりする。映画館通りで、ゲストとファンの交流が生まれることもある。それは上映会場となる映画館、関連イベントが行われるホール、ゲストの宿泊ホテルが、すべて歩いて行ける場所に設定してあることが大きな要因だ。郊外の大きな会場に一度に観客を閉じ込めるタイプのイベントでは、街のにぎわいは生まれない。映画館通りにこだわったイベントならではの光景なのである。

映画祭は、回を重ねるごとに市民から認知され、映画関係者からも一定の評価を得られるまでになった。しかし『映画祭効果』は、気がつくと、もっと大きく広がっていた。まず映画祭の開催がひとつのきっかけとなり、映画館通りがリニューアルされ、通りの様子が一変した。

映画祭から刺激を受けて、市民の動きも活発になってきた。「シネマ・ストリート・バンド」というジャズバンドが誕生し、不定期ながらライブ活動が続けている。映画祭にボランティアとして参加していた大学生や高校生たちが中心となって「盛岡自主制作映画祭」を立ち上げた。上映会場はたくさんの方々に埋め尽くされ、熱気にあふれている。自分も映画をつくってみたい、イベントを仕掛けてみたいという若者たちの新たな交流の場ともなっているようだ。

●映画祭から生まれた活動の連鎖

さらには県立大学の学生が呼びかけ人となり「シネマ・ストリート・プロジェクト」という活動がスタートした。このプロジェクトでは月に2回、若者を中心とする市民20～30人が集まり、映画館通りや交差する大通の清掃や放置自転車の整理などを行っている。ボランティア活動に参加した市民

僕らがゴミ拾ったら かっこよくない？

鈴木 圭史

KEISHI SUZUMURA

シネマストリートプロジェクト
代表

には地域通貨が与えられ、映画館、映画館通りや大通などの協力店で利用できる仕組みになっている。

行政も動き出した。盛岡市が音頭をとって観光協会、商工会議所、周辺町村とともにフィルム・コミッションを発足。盛岡地域を映画やドラマのロケ地として売り込もうと意気込んでいる。今年、全国で公開された映画『壬生義士伝』も追い風になっているようだ。ロケ地として名乗りをあげようという動きは、古い街並や歴史的建造物の保存、街中の川や緑を大切にしながら街のたたずまいを守り育てることにつながるかもしれない。

シネマストリートプロジェクトは、地域通貨(C:シネマネー)を利用した活動です。主な活動になるのは、月2回のゴミ拾い活動です。ゴミ拾い参加者を一般から募り、1時間のゴミ拾いに参加してくれた人に「C」を配ります。その「C」は、この活動に参加協力している地域のカフェ、美容室などで支払いに利用することができます。と、とても単純な仕組みです。ゴミ拾い活動には、毎回20名以上の人に参加します。参加者には、高校生から社会人の人まで幅広く集まります。僕たちの活動は、この町で暮らす人たちが中心になってこの町をよくしていくこと、おもしろくすることが目的です。

これまでの活動には、ゴミ拾いはもちろん、大通り歩行者天国でのフリーマーケット、携帯灰皿配り、自転車撤去活動、空き店舗での展示スペース貸し出し等様々なことを行なってきました。この様な活動は、普段の生活の中で問題に思う“ちょっとした事”を形にしたものです。また、どの様な所でも行なわれている活動ではないでしょうか？しかし、大きな相違を挙げれば、この活動は、自分たちで問題を発見し、自分たちでアイデアを出し合い、自分たちで行動に移しています。そしてこれからも主体性を失うことなく続けていきたいと考えています。

僕らの活動はボランティアではありません。

例えば、“大通りのゴミを拾うことは誰の責任なのでしょうか？”というスタンスで考えれば、捨てた人や、商店街、自分以外の人に責任を転嫁できてしまうことです。

盛岡市には、たまたま映画館通りがあった。当たり前のように感じていた、その装置をもう一度見直したとき、新しいまちづくりが始まった。ひとつの結果が、次の仕掛けにつながった。何かを始めたいと思っても、ことはそう簡単には運ばない。しかし、このまちを元気ある、誇れるまちにしたいと思う市民がひとりでも多く動くとき、まちは確かに変わる。そのことを盛岡市民は実感をもって知ることができた。映画祭というひとつのイベントが立ち上がったとき、そこから多くのことが始まっていたのである。

しかし、この町に住み、自分の環境という観点で見たとき、気負うことなくゴミを拾うことができるのではないのでしょうか？そう、僕もこの町を形成する一人だと思います。

この町に来て5年になりますが、多分、僕よりこの町に長く住む人たちがこの町をよくするアイデアをもっていると思います。大通りでは、駐車場の問題や、放置自転車などの問題は随分前から挙げられています。しかし、具体的な解決は今日なされないままです。問題を蔑ろにすることなく、僕らができることで解決できればいいなと思います。

僕らのゴミ拾い活動の1時間後には、またゴミが捨てられています。しかし、その時間は、きれいな通りを観ることができます。根本的には何も解決していない様に感じますが、参加してみると案外違うものです。

一度、僕らのごみ拾いに足を運んでみてください。

Mail to kc@comm.soft.iwate-pu.ac.jp
<http://www.comm.soft.iwate-pu.ac.jp/kc/project/>

旧町名には物語が 積み重なっている

金野 万里

MARI KINNO

文化地層研究会事務局

かつて盛岡発のある伝説的なホームページがあった。「盛岡で就職した仙台出身の30代前半の男性」というプロフィールの「まると」氏が主宰する『イワテライフ日記』だ。彼の感性で切り取られた盛岡の町並みの写真と簡単なコメントによって、そのホームページは「毎日かかさず」更新された。小さな路地を歩くお年寄りの姿や古い木造の民家、ビルやマンションの谷間から覗く岩手山。ただそれだけのサイトだったのに、クローズまでのたった2年半で20万アクセス。その掲示板には毎日たくさんの投稿が寄せられた。「盛岡には普段気付かないこんな町並みがあったのか!」「旧町名のバス停の写真が好き!」。

平成13年、あるフォーラムに「まると」氏が引っ張り出され、そこに掲示板の常連投稿者達が集合。当時掲示板で話題になっていた、バス停の名が「内丸」から「県庁・市役所前」に代わったことなどをきっかけに、旧町名について話し合った。

そして、そこに参加していたある青年が「まず、現町名と旧町名が併記された地図を作ろう」と提案した。『城下盛岡旧町名探求地図』を作るため、『文化地層研究会』は市民グループとして活動を開始した。

私たちの足下には藩政時代からの盛岡の歴史が眠っている。それをすこしずつ掘り起こすことで、そこに街の物語といえる文化の地層が見えてくる。『文化地層研究会』という、時に考古学系の団体と間違われる名前は、そういう意味を持って付けられたものだ。

会員たちが手弁当で作成無料配布した1万5千部の地図は、好評のうちに配布を終了した。そして、旧町名に特化して制作した拡大改訂版は、地元書店の協力で1部100円で販売されることになった。この地図に対する反響は、会員の誰も予想できなかった。地元の新聞やTVで紹介されたその日から、事務局には日に100件を超える問い合わせ、注文の電話が殺到した。書店での売り上げも「前例がない」ものだった。こう

して初版1万3千部は約1ヶ月で完売した。(現在、第3版まで4万5千部を発行)

その頃、八幡町という町に古くからある消防番屋が取り壊され、新しいコミュニティ・センターになるという情報が流れた。この番屋には、既に保存建造物に指定され観光名所となっている紺屋町の番屋と同じような古い望楼があった。外観はそんなに立派なものではないし、今は周囲のビルやマンションに埋没して、その存在は市民からも忘れられようとしていたが、建築当時には、城下町を一望することのできるこの望楼は目を惹く建物であったに違いない。また、盛岡には「南部火消」という伝統ある消防システムが脈々と息づいており、今も秋に行われる八幡宮の祭典では分団ごとに山車が繰り出されている。八幡町の番屋も「い組」の山車の基地であり、地域防災の拠点となっているのだ。だからこそ、そこにそびえる望楼は、「い組」にとっても八幡町という町にとってもシンボリックなものであるはずだった。

その望楼付きの番屋が簡単に取り壊され、新建材に覆われたコミュニティ・センターになってしまうことに対し、『文化地層研究会』では、老舗料亭の保存運動などで実績のある『歴史を活かした街づくり実践隊』といっしょに「八幡町番屋」保存運動を繰り広げることとなった。建築物としての調査報告の勉強会や建築の専門家の解説による見学会、保存要求の署名運動など、市民のレベルで可能な運動を行った。保存運動には、八幡町だけにとどまらず市内全域の市民から賛同の声があがった。市長に対する公開質問状を提出した際には、盛岡の全マスコミが市長室に押しかけ、その様子を報道した。結果として、番屋は壊され新しいコミュニティ・センターができた。しかし、その上には100年を越す歳月を経て盛岡の街を見つめてきた望楼が、修理された上で、保存されている。

文化地層研究会編
城下盛岡旧町名探求地図

平成十四年九月一日作製

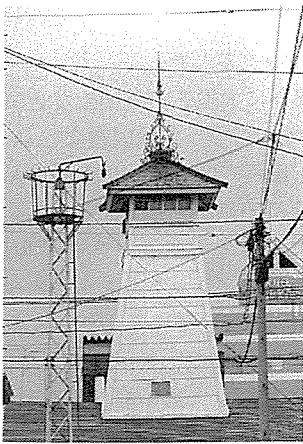
城下旧町名探求地図



紺屋町の保存建造物「ござ丸」前で



中心部を流れる中津川沿いで



望楼が残った八幡町番屋

その後、『文化地層研究会』は、「八幡町番屋」保存運動、旧町名フォーラム「盛岡旧町名・井戸端会議」開催、公開講座「城下盛岡伝説探求シリーズ」、旧町名の息づく地区を巡る「街歩きシリーズ」などの活動が続けている。そしてその度に「旧町名復活」に賛同する市民の声が大きくなっていると感じている。一枚の地図が市民の話題となり、旧町名を「良いもの」「共通の財産」として再認識していくきっかけとなったのであればこんなにうれしい事はない。

街には歴史があり、それと共に培われてきた文化がある。

戦後の復興と発展は「合理化」というスローガンのもと、日本中の街を画一的なものに変えてしまった。それは街々が持っていたオリジナリティを喪失させ、人々がそこに住まうことの誇りを奪っていった。

そして「ないもの探し」。盛岡には〇〇がない。〇〇もない。この〇〇には全国にチェーン展開している店や娯楽施設の名前が入ることが多い。

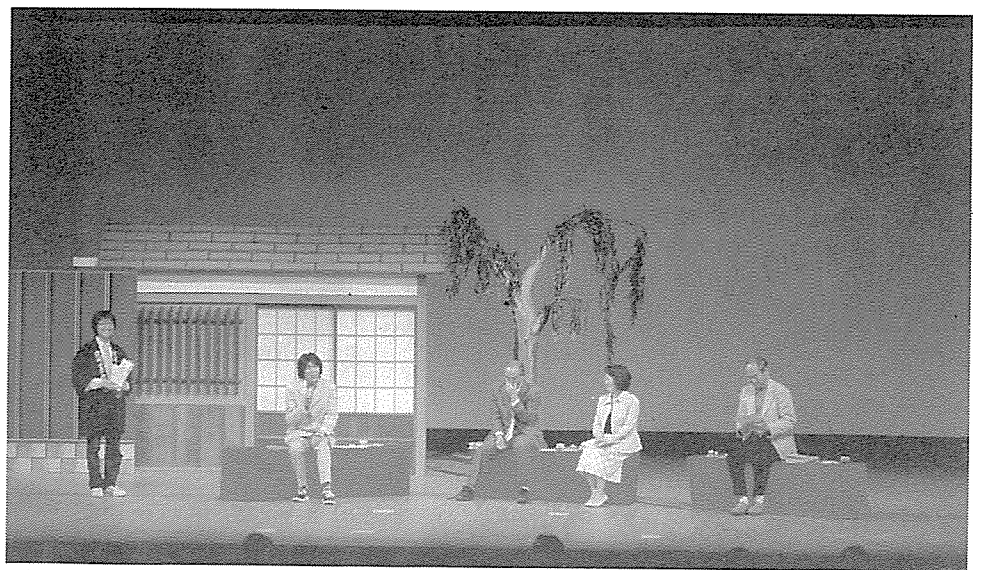
『イワテライフ日記』で私達が知った「盛岡の良さ」は、〇〇もある、〇〇もある。そういうものだった。「あるもの探し」をしよう。まず、盛岡にあって他の地域にないものを探そう。また、いつもは見なれている街の景色やそこにある文物を少し違った角度で見てみよう。町並みや建物だけでな

く、自然の景観、食べもの、習慣、祭り、そして人。盛岡だけのものが見えてくるはずだ。

街のアイデンティティを取り戻そう。そんな思いで街を歩くと、私たちがいつも何気なく目にする街や道には、そういった歴史や文化に彩られた実にたくさんの物語が、地層のように積み重なっている事に気付く。そのひとつが『旧町名』だと考える。また、番屋のように、特別に立派な建物や由緒のあるものでもない普通の町屋や商店であっても、その文化の地層からひょっこり顔を出している。歴史的な文化遺産であり市民の財産なのだ。

この「旧町名」や「町並み」を大事に守っていくことが、また守っていくことのできるしくみを作ることが、私たちの街『盛岡』の誇りある明日に繋がっていくのではないかと、そう私たちは考えている。

研究会会員の平均年齢は37歳。インターネットがきっかけで『文化地層研究会』が生まれたことは、まさに今目的なことだと言えるだろう。そしてその活動の原動力になったのが、「まると」氏の視点だったことは間違いない。いわゆる「よそもの」の彼が盛岡を見た新鮮な目線と、次世代を担う若い感覚が、歴史や伝統文化の価値がノスタルジーではないということに気付いたのだ。



盛岡旧町・井戸端会議的一幕

街はいたるところ ステージ 僕らの舞台

丸山 安曇

AZUMI MARUYAMA

Walking In The Street

代表

(岩手大学大学院生)

「ねえ、Tシャツの展覧会やらない？」

「じゃあ大通りでやろうよ。」

僕がこう答えたことは、自分では特に珍しいことではないと思っていた。2002年の夏、僕たちは盛岡市の大通りの歩行者天国を利用して、市民参加型の展覧会「路上Tシャツ展示会 Walking In The Street」を開催した。盛岡に来て4年、大学生活を過ごしてきた盛岡で最後にドカアンとやってやりたかった思いもあった。そこにきて展示会の話、この際自分たちだけで作品発表して終わるのではなく、この街にいる人全部が参加できて、楽しめる、そんなイベントにしようと思って仲間を集めた。

ファッションのイベントをやろうと思ってから街を歩くと、この街ってほんとに上手い具合に出来ているのに気付く。空の開けたメインストリート、歩いて回れるほど良い広さ、これはこの道がそのまま会場になるな、とほくそ笑む。またイベントの運営資金は岩手大学から援助をもらう。何か新しい活動を展開する学生には最大50万円までの資金援助する、っていう素敵なプロジェクトが岩手大学にはあるのです。さっそく大通商店街に話を持ち込むも即決。商店街としても通りに人が集まるようなイベントを企画してくれる若い人が欲しかったらしい。作品は公募、また作品はTシャツのデザインにとどまらず、その着こなし、モデルまで出品者に用意してもらい当日展示会場には約50人の盛岡産カッコ良い老若男女が集った。なんと下は小学生から上は80代の熱いオッサンまで。これ

にはホントにビックリした。

え？、最近郊外に大型店が進出してきて空洞化が心配だって？ 全然問題ないね、周りを見なよ、盛岡にはこんなにたくさん面白いことを考えてる奴がいるんだぜ。

展示会自体はかなりのフリースタイル。通りの入り口でパンフレットをもらった後は、通りのどこかを歩いているモデルを探し出し、鑑賞し、コミュニケーションをとる。雨が降ったのに800人近い観客が訪れ、また雨も最後には晴れた。雨上がり的大通りでのファッションショーは路面がキラキラ光って、その会場にいたすべての人にとって忘れられないものになったと思う。

このイベントを終えてわかったこと。

- ①街は発想次第で500倍面白くなる。
(だって普通の道が発想を変えるだけでファッションショーの会場になるんだから。)
- ②街はがんばる人を応援する(何をやるにも理解して、協力してくれる。そんな人がこの街にいたから出来たことですね)
- ③熱いイベントは天候をも左右させる効果をもつ。(当日はものすごい雨、しかし最後のファッションショーの時急に止んだのです。これこそイベントパワー。)
- ④盛岡は熱いっ！(色んなことを考える人がいて、それを理解してくれる人がいる。そしてそんな人たちが繋がりがやすい適度な大きさである。)

街をつくっているのは「人」だ。だれもが楽しく生活していれば、何が無くてもその土地の温度は上昇していくのだろう。



公募制プロジェクトの募集について

今期も各地方ブロックの活動を活性化することを目的とする「公募制プロジェクト」の募集を行います。

これは、ブロック活動に競争的な環境を導入することによって、地方ブロックの会員規模に起因する較差を是正しつつ、ブロック活動にインセンティブを与えるもので、従来のブロック予算とは別に、地方ブロックが独自に企画立案するすぐれたプロジェクトに対して、その遂行を支援するための予算を配分するものです。

応募締切りは11月末です。本会の活性化のために有意義なプロジェクトの応募を期待しております。

【応募要項】

1) 公募の対象となるプロジェクト

都市環境デザインに関わるものであれば特に内容を限定することはありません。ただし、業務的なプロジェクトに関連するものは対象としません。

2) 応募資格

JUDI正会員1名（ブロック幹事でなくても可）を代表者とし、各地方ブロック単位もしくは複数のブロックの連携で提案してください。

3) プロジェクトの期間

原則として1年間を遂行期間としますが、プロジェクトの性格によっては、複数年度にわたるものも可とします。ただし、複数年度にわたる場合は、年度毎に継続の応募を提出していただきます。

4) 応募書類

書式は任意としますが、必ず以下の事項について記載してください。

提出方法は郵送、ファックス、E-mailのいずれでも構いませんが、締切り日の午後5時までに「都市環境デザイン会議・事務局」必着とします。

①プロジェクトの意義・目的と期待される成果

②プロジェクト遂行の方法と作業工程

③プロジェクト遂行の体制

④予算の使途と金額

⑤その他当該プロジェクトに関係する追記事項等

5) 予算および公募件数

本年度は1件あたり30万円程度の予算とし、公募件数は2件までとします。

6) 応募締切りおよび審査

11月30日（日）を応募締切りとし、12月12日（金）の代表幹事会において審査し、その結果を事務局から各応募者に通知します。

7) 成果の公表

プロジェクトの成果については、簡易な報告書の提出を求めるとともに、機関誌[JUDI]に公表することを義務付けるものとします。

また来期の定例総会までに予算執行にかかわる経理関係書類の提出を求めます。

海外会員について

当面海外会員数は少数であることを前提に、正会員と同資格とし、会費は半額の1万円とすることとしました。

ただし送付物はニュースのみで、書籍等は送付しません。また、正会員が海外居住となって郵送先が国外の場合は、本人の希望により同じ扱いといたします。

その他

国土交通省の「美しい国づくり政策大綱」についての意見を募集いたします。JUDIホームページ上の意見交換の場「会員フォーラム」に皆さまのお考えをお寄せください。

お知らせ

■関東ブロック

山川 良子

MORI TOSHIHIDE

関東ブロック

ワイズ環境デザイン室

予告：都市環境デザイン会議 関東ブ
ック キャラバンシリーズ第4回

「山梨県・勝沼ぶどう郷の風景考」

関東ブロックでは、11月15日に、
キャラバンシリーズ第4回を山梨県勝沼
町にて行う予定です。第4回キャラバン
「山梨県・勝沼ぶどう郷の風景考」で
は、勝沼町内のワイナリーや丘陵地に広
がるぶどう畑などを見学し、これらを活
かした地域づくりについて勝沼町の皆さ
んと一緒に考えます。錦秋のぶどう畑を
眺めながらワイングラスを傾け、ぶどう
郷の風景について語り合ひましょう。多
くの皆様のご参加をお待ちしております。

■日時 平成15年11月15日(土)

(キャラバンは日帰りですが、15日にご
宿泊を希望される方には、宿泊施設をご
紹介します。)

■コースと見所(予定)

9:00 新宿駅西口集合

11:00～勝沼町に到着後、太郎吊橋、国宝
大善寺、等々力寺町など勝沼町内
の見所を見学

昼食後、各自「ぶどうの丘」見学

14:00～勝沼町内のワイナリーを見学

16:30～パネルディスカッションと意見交
換会勝沼町民、勝沼町役場の方々
を交えて意見を交換

19:00勝沼町を出発

■参加費 未定

(往復バス代、資料代を含む。昼食代、
ワイン試飲代は各自負担です。)

■申込み先

高見公雄 ㈱日本都市総合研究所

E-mail: takami@nihon-toshi.co.jp

事務局より

1. 新会員の紹介

2003年5月1日～6月30日の入会者は下記の
通りです。(入会順、敬称略)

6月30日現在の会員数は、480名です。

正会員氏名	勤務先(ブロック)
辻 浩子	(株)魁景観計画研究所(関西)
長町 志穂	松下電工(株)(関西)
岡 絵理子	大阪大学大学院工学研究科(関西)
七字 祐介	(株)タイセイ総合研究所(関東)

2. 退会者(2003年5～6月)

上井正之、釘宮裕二、黒野弘靖、佐々木賢範、
白井治、世木田茂樹、地福由紀(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
川井 由寛	SLAスタジオランドジャパン(株) 〒106-0031 東京都港区西麻布1-3- 18 ハレノグチ301 Tel、Faxは変更なし
中尾隆太郎	〒874-0919 大分県別府市石垣東 6-8-2 アーバン鶴見1001 Tel. 0977-21-8915
三浦 裕二	都市環境研究会 〒101-0041 東京都千代田区神田須 田町2-17 サガミビル2F Tel. 03-5297-8562 Fax. 5297-8561
祐乗坊 進	(有)ゆう環境デザイン計画 〒206-0034 東京都多摩市鶴牧1-1- 14 コージーコート704 Tel. 042-339-9001 Fax. 339-9002
横山 裕	(財)新潟観光コンベンション協会 〒950-1101 新潟市山田2307-272 Tel. 025-265-8000 Fax. 266-3357

広報・出版委員会

澤木 俊岡	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	加茂みどり
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康